

2008年度 第4回 生命の意味を問う

「深読み生物学～生物学からのもう一つのメッセージ」

2008年11月1日 (土) 14:00～17:30

講師：西川 伸一 (理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター 副センター長)

iPS細胞という言葉が毎日のように新聞、テレビを賑わせている。これが何を意味するかを考えたいと思って、このプログラムを持った。講師は、日本の万能細胞研究を牽引し、科学技術政策にも大きな影響力を持っている方である。講師はその意味するところを、科学的側面だけからではなく、文化、社会的側面からも分かりやすく説明された。質問にも丁寧に答えられた。聴く者は、医師から神学者、哲学者、牧師、僧侶、主婦にまで及んだが、どの人もよく理解できたように思う。



それだけに、語られた内容は衝撃的であった。iPS細胞は、一回限りの人生と思っ

てきた生命を、誰でもいつでも一からやり直しすることが可能であることを示したという。これは、これまでの生命観を根幹から揺るがすことではないか。宗教者は、それを踏まえた上でなお何を語り得るかが問われる。

この生命操作技術は、病気の診断や治療に飛躍的に新しい可能性を与える。社会は、そのどれを進展させ、どれを断念すべきかの選択を迫られる。講師は、新しい医療の開発は研究者や医師だけでなく、患者も含めたコミュニティーによって図られるべきだと主張された。しかし、これだけでよいのだろうか。これだけだとアクセルしかない車になりかねない。車が本来の目的地に向かうためには、ブレーキもハンドルも必要である。宗教はこの強力なエンジンを積んだ車のハンドルとしての役目をしっかり担い得るか否かが問われる。講師は、日本のキリスト教もシンクタンクを作ってはどうかと進言された。新しい生物学の潮流を押えた上で、科学者にも説得力のある生命倫理を構築することは、緊急の課題であると思われた。

小久保正 (中部大学生命医科学科教授)

《参加者アンケートから》

- ・難しかったのですが、宗教的な関わりもあると知って有意義でした。
- ・知識を得るのにはよかったが、あまり範囲が広過ぎて対応出来ないところがあった。
- ・関心のあるテーマでした。
- ・生きることの意味や老化や死に対する意識の変化を生物学の進歩はどう受け止めることができるのだろうか。

「アフリカに接近

～ タンザニア農村とのフェアトレードを通して」

2008年11月9日（土）16:00～11月8日（日）12:00

講師：辻村 英之（京都大学大学院農学研究科准教授）

私たちの心を、豊かな香りと味わいで和ませてくれる一杯のコーヒー。しかし、そのコーヒーの生産者である南の国の人々は先進国のマネーゲームに左右される厳しい状況に置かれている。今回は、農業経済の専門家、コーヒー研究の第一人者であり、キリマンジャロコーヒーの生産地であるタンザニアのルカニ村と10年以上に渡って交流を続けてこられた辻村英之さんを講師に迎え、コーヒーを取り巻く状況と不公正な取引の仕組みを学び、私たちにできること

引が成立するのか」「価格安定や生産者保護の仕組みはなぜ崩れたのか」など多くの疑問や質問が出され、次第に理解が進むなかで、投資家がクリックひとつで利ざやを稼ぐ一方、ルカニ村という現実の村に住む人々が子どもの教育をあきらめ、出稼ぎに行かざるを得ない状況が生じる構造が見えてきた。

2日目は、フェアトレードコーヒーのパッケージの記載内容をヒントに、生産者と消費者にとってフェア＝公正とは何かというテーマで話しあった後、辻村先生の取り組むルカニ村・フェアトレードプロジェクトについてお話し頂いた。それまでは買い取り業者の示す取引基準価格に従わざるをなくなった農民が、自治組織をつくり、価格の向上のために競売所への直接販売を開始した。生産者の内発的な行動とルカニ村・フェアトレードプロジェクトが結びついて相乗効果をもたらしていると感じた。こうした、価格形成や流通へのチャレンジに対して、私たちが自立した消費者として



を考えるセミナーを実施した。

1日目はコーヒーの生産から流通と、価格形成についてをテーマとした。まず、コーヒーの味の7割を決めるという生産について学んだ。苗作りから収穫、水洗、乾燥、選別、袋詰めに至る時間も手間のかかる工程を担うにもかかわらず、農民が手にするのは、日本の喫茶店で出されるコーヒー価格の0.5%にも満たない。なぜそんな低額に抑え込まれているのか。それを知るには、先物取引や国際基準価格形成など難解な世界経済のしくみそのものを理解する必要がある。「なぜ商品実体のない先物取



のあり方を問われているのではないだろうか。

今回は、辻村さんが働きかけて日本で販売を始めたルカニ村コーヒーをご持参いただいた。ホームロースターで生豆を焙煎し、一晩寝かせて香り高くなったコーヒー

を2日目に全員で味わうことで、五感を刺激しながらより深く考え、感じることでできるセミナーになった。

佐藤友紀（大阪府立四条畷高等学校教諭）

《参加者アンケートから》

- ・コーヒーの値段のうちわけ、缶コーヒーの表示など、普段考えもしなかったことを考える機会を与えていただいて、とても良かったです。
- ・自分の生活の中でのコーヒーの位置づけから始まり、世界の現状、貿易、フェアトレードのことまで、知りたかった内容が盛りだくさん。
- ・コーヒーの焙煎など、色々なイベントを味わうことができ、楽しいワークショップでした。

2008年度 第5回 修学院キリスト教セミナー

「『後世への最大遺物』の読まれ方」

2008年12月8日（金）14:00～17:00

講師：鈴木 範久（立教大学名誉教授）

長年にわたって独自の視点から日本キリスト教史を探求してこられた鈴木正久氏による講演を通じて、内村鑑三が残した影響の特質を再考し、日本におけるキリスト教の独自性について、参加者の理解を深化、共有化することをねらいとした。

テーマのように影響史からの探求を理解するためには、内村のみならず、日本キリスト教史全般にわたる多くの前提的知識が必要となるが、参加者の多くが本企画の意図を十分に理解して参加されたことと、講師が初学者

向けに配慮ある講演をされたことで、参加者は十分に理解を深めることができた。比較的多くの参加者があったこと、また、講師との質疑（はなしあい）の時間にも余裕があったことによる参加者の満足度などは評価できる。

また、参加者アンケートによれば、専門的知見のみならず、講師の探求心と研究者としての姿勢にも尊敬と親しみを感じられた方もあったようで、充実感のあるセミナーとなった。

入治彦（日本キリスト教団京都教会牧師）



《参加者アンケートから》

- ・内村から影響を受けた側の人々の話を述べられたことが斬新だった。また講師の鈴木先生と参加者との質疑応答が十分に為されていたと思う。
- ・個人的には「宗教の押し付け」を嫌った内村の万人救済に関する考えをまとめて紹介して下さればと思います。（「仏教徒は仏教徒のままあらしめよ」という嘗て読んだ内村の言葉に、家族がノン・クリスチャンである私は非常に感銘を受けました。（私自身はプロテスタントです。）

「地球温暖化の世紀において『生命の尊厳』を問う」

2009年1月10日（土）14:00～17:30

講師：小原 克博（同志社大学神学部教授）

今日生命の尊厳は、様々な要因によって脅かされている。それは、例えば動物と人間の関係にも表れている、と講師は話しかけた。

昔ばなしや神話の中には、人と動物が助け合って生きた物語が多くみられる。しかし、いつのまにかこのような関係は崩れてしまった。人間と動物の共生は、しばしば生態系の保全と関連して語られる。しかし、生体系の保全が個別の生命を脅かす例がある。例えば、琵琶湖では、生体系を保護するために、捕ったブラックバスなどの外来魚を湖に戻すことを禁止する条例がある。その結果として、子供が捕った魚を乱

暴に殺して遊ぶことがおきている。

私たちの中には、生きるに値する生命と、それに値しない生命を分別し、生命を序列化する傾向がある。ナチのホロコーストは、その表れである。この思いをいかにして越えるか、人間は動物を始めとする他の生命体とどのように共生し、この地球を次の世代に譲り渡していくかが、問われている。

この発題を受けて、キリスト教や仏教はこの問題に対し、どのようなメッセージを持っているかが、参加者の間で様々な角度から話し合われた。

小久保正（中部大学生命医科学科教授）

《参加者アンケートから》

- ・大変興味深い問題をわかりやすくお話下さって感謝です。
- ・「とむらう」という言葉に対して英語はあるのでしょうか。「たたり」と恐れる日本人の心の在り方は、どの程度世界で通用するものなのでしょうか。
- ・“可視化スルコト！”このことを大切に持ち帰ります。



第3回お茶こころえの会 「真冬の夜咄し ～ ロウソクの光で楽しむ『お晰し』と『夜咄し』」

09年2月12日（木）16:00-19:30

落語：森乃福朗師匠

冬の夕刻から夜にかけて、ろうそくの灯りの下で行われるお茶事である「夜咄」の幻想的な雰囲気味わい、また重ねて落語家の「お晰し」も楽しむという趣向。初めての試みだったが、参加者にも楽しんでいただけた。天気にも恵まれ暖かい日だったので、日が暮れる様子や、暮れてからのローソクの灯など、参加者と師匠で話がはずみ、静かな中の心暖まる会だった。

《参加者アンケートから》

- ・夜ばなしの雰囲気がとてもうれし。能舞台でのぜいたくなひとときをありがとうございました。
- ・時代考証にもお詳しく、正当な落語を聞くことができたという満足感が一杯です。

第3回京のキリシタン史蹟を巡る ― 伏見編

09年2月21日（土）13:00-17:00

講師：三俣 俊二（聖母女学院短期大学名誉教授）

あまり知られていない伏見地区のキリシタン史蹟。伏見郷土史の専門家である三俣俊二先生の講義を聞いた後、先生の案内で現地をマイクロバスで巡った。伏見教会の跡地をはじめ、牢屋跡、処刑場跡など、当時のキリシタンの苦難に思いを馳せる一時となった。前々回の洛西編、前回の東山編は「京のキリシタン史蹟を巡る」の著者で洛西バプテスト教会牧師の杉野先生の案内であったが、今回の三俣先生の講義や現場でのガイドも参加者には好評であった。



《参加者アンケートから》

- ・今日のようなプログラムがなければ知りえなかった伏見でのキリシタン史蹟を自分の足でたどったことがよかったです。
- ・三俣先生の弱者（虐げられた人々）へのあたたかい視点と信仰に対して敬意をもちました。

2008年度 第2回 人生の朝と夕べをいかに生きるか

「夕べになっても光ある日々」

09年3月13日（金）18:00～3月14日（土）12:00

講師：岡部 元英（日本バプテスト連盟 北白川バプテスト教会牧師）

講師の岡部元英氏は、日本バプテスト病 深い時間を共有した。
院チャプレンとして、長くこの国における病院牧会の開拓者的働きをつづけてこられた。講演ではその豊富な経験から、主題に示されたように、人生の最期に至ってなお示される豊かな恵みと意味を語っていただいた。



講演は一日目の夕べと二日目の朝の二部によっ

て構成され、とくに二日目の後半には「はなしあい」として参加者は感想や意見を交換し、前夜の懇談の時間もあわせて、意義

まず、岡部氏は病院チャプレンとしての経験のなかから、いくつかの事例を紹介されながら、臨床において求められている牧会者の姿を示された。就任以前の一三年間に教会牧師として経験された葬儀は三名であったが、病院で立ち会われた臨終はじつに二千三百名

にも及んだという。そこに潜在する独自の課題の前に立つために、講師は同志社大学神学部の講義を聴講され、実践面だけでは

なく理論面においても探求をつづけられた。こうしたご尽力はやがて病院においてはターミナルケアグループ、さらにはホスピス病棟へと発展し、神学教育においては同志社大学臨床牧会訓練コースへの礎となった。

岡部氏は、まず、統計的な観点から現代における日本社会の死をめぐるいくつかの問題を挙げられたのち、マズロー、キケロ、朱新仲、モーム、茂吉などを通して、人生において死がどのように受けとめられてきたのかを丁寧に述べられた。作家モームは「統計数字は例外を包含するが、人間の死亡率は100%である」といい、歌人茂吉は「暁の薄明に死を想うこと有り 除外例なき死というものを」と詠んだ。いっぼうでイエスは、「あなた方のために場所を用意に行くのだから、そしていって場所の用意ができたならば、また来てあなた方を私の所に迎えよう」と語った。人間の諦念とイエスの言葉はどこで切り結ばれるのだろうか。一日目は、避け得ない死をどのように受容することができるのかという「終末期医療」の視点を提示されたところで終えられた。

二日目は、終末期が患者と家族にとってどのような事態であるのか、やはりご経験

のなかからいくつかの事例によってそこに内包されるさまざまな生、死、看取りの姿を印象深く語られた。最後に講師は、「私は死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、私と共に目を覚ましていなさい」というゲッセマネにおけるイエスの言葉を引用し、「主の死をこの身に負った」（パウロ）人びととともに現実を受け入れること、その営みと祈りのなかに看取る者の使命がある、と多年の経験から得られた結論を示してくださった。

年度末の故か、参加者が少なかったのは残念であったが、朝の「静想の時」（京都教会入牧師担当）も含めて充実したプログラムとなった。

中村信博（同志社女子大学教授）



《参加者アンケートから》

- ・日頃ゆっくり考えたいと思いながらなかなかできなかったことを話し合えました。
- ・久しぶりに先生のお話をうかがい、いろんなことを思い出しました。あらためて、学恩を感謝しています。

今年の冬はセミナーハウス周辺でも積雪を見ることは殆ど無く暖かい冬でした。自然に恵まれたセミナーハウス周辺では、すでに春の息吹があちこちで感じられ、サクラの開花も早そうです。おかげさまで、2008年度のプログラムもすべて無事に終了し、来年度は、新たな企画で修学院フォーラム（福祉：老い：生命）が始まります。開発教育セミナーも充実したものになりそうです。皆さまのご参加を心からお待ち申し上げます。

編集子（奈良）は、一身上の都合で、3月末で退職をすることになりました。2年と2ヶ月、いろいろとお世話になりました。有り難うございました。

発行人：小久保正（関西セミナーハウス活動センター運営委員長）

発行所：（財）日本クリスチャンアカデミー 関西セミナーハウス活動センター

〒606-8134 京都市左京区一乗寺竹ノ内町 23 電話：075-711-2115 FAX：075-701-5256

E-メール：office@academy-kansai.org ホームページ：http://www.academy-kansai.org/